道徳授業／誌上チェック＆アドバイス

教えて！加藤先生

筑波大学附属小学校
加藤 宣行 先生

相談者・相談内容：児童の考えを深める授業

千歳市立
泉沢小学校
山崎 太輔 先生

６年生になり、これまでの「友だち観」についてとらえ直す１時間でした。これからの自分についてよりよい未来を描いてほしいと願い授業を行いましたが、「現時点での自分たち」については考えることができるものの、なかなか「未来の自分たち」については考えが広がらなかったと感じています。

「よりよい未来」を子どもたちがしっかりイメージできるような手立てを教えてください。

6年

【主題名】 **友への思い**

【教材名】 **友のしょうぞう画**（光文書院）

主題を通して考えたいこと

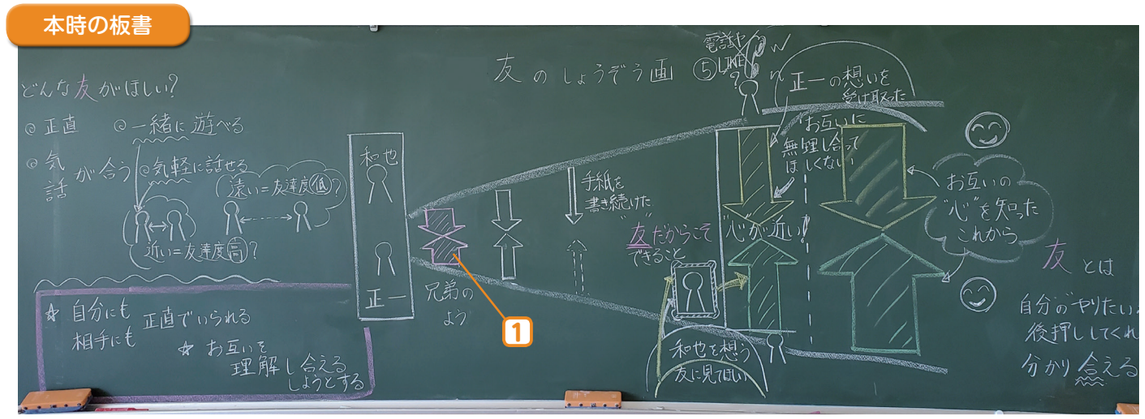
〈友情、信頼〉

●「近くで何か一緒に事を成すことが友」ととらえる児童が多い。友とは「物理的な距離」から生まれる関係性ではなく、離れていても心からつながろうと互いを思い合い、相手の幸せを願う心から生まれる関係性であることを理解し、自分たちにも互いを思い合うよき心があることに気づかせたい。

本時の展開

学習活動	手立て
○自分の「友だち観」を明らかにし、ノートに記録する。	●授業をする前の子どもの価値観を明らかにする。そして、教材を読む視点をもたせる。
○教材を読み、登場人物たちの「友情度」が高いところについて考える。 ○互いが互いを思い合うことのよさ（精神的な距離感の近さ）について考える。	●「最も友情度が高いと感じる場面はどこか」と問いかける。 ●板書で、登場人物の物理的な距離感を表したうえで、「離れているのになぜ友情度が高いといえるのか」という問い返しを行い、友情についてさらに考えを深める。
○再度「友だち観」について考え、ノートに記録する。また、教材を通して変容した自分に気づく。	●これまでの学習をもとに、「友だち」についてもう一度自分自身で考え、それを板書する。

本時の板書



授業で工夫した点

❶ 自分たちの変容に気づかせるために

導入と終末を同じ位置に板書し、考えの変容が一目でわかるようにした。

❷ 子どもの気づきを促すために

チョークの色と太さを変えて、物理的な距離と精神的な距離を図式化して示した。

授業の内容

（T：教師　C：児童）

T：どんな友だちがほしいですか。

C：いつでも遊べる友だち。

C：お互いに気軽に話せる友だち。

T：普段から近くにいる人ほど友だち度が高いのですね。では、「距離が離れてしまうと友だちとは呼べなくなる」のでしょうか。今日は「友だち」について改めて考えてみましょう。

（範読終了後）

T：２人の友だち度がいちばん高いのはどこでしょうか。

C：最初だよ。「兄弟のようだ」って書いてあるもん。

C：でも…何か引っかかる。最後の方も友だち度は高いような感じがする…。

T：最後の和也と正一は離れていますが、なぜこの場面の方が「友だち度が高い」といえるのでしょうか。

C：距離は離れてるけど、正一が和也を思っているとわかったから心が近い。

T：「心が近い」を矢印で表すとこんな感じでしょうか。（板書内の1の矢印を描き、短い矢印から段々と太くしていく。）

C：そうそう！

T：和也のことを思うなら、電話じゃだめだったのでしょうか。

C：病気で苦しんでいる正一が和也に見せられる「友だちだからこそできること」が肖像画だと思う。

C：ちょっと待って。それなら友だち度が高いのはここじゃない。さらにこの先だと思う！

T：どういうことですか。

C：最初は仲良しだしよく遊んでいるから友だち度は高いんだけど、最後の２人はお互いのことをちゃんとわかり合えたから、この先の方がもっと友だち度が高くなっていくと思う。

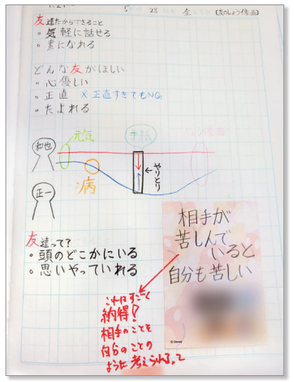
T：なるほど。離れたからこそ見えてきたり、わかってきたりしたことがあるのかもしれませんね。

T：もう一度最初と同じことを聞きます。みなさんはどんな友だちがほしいですか。

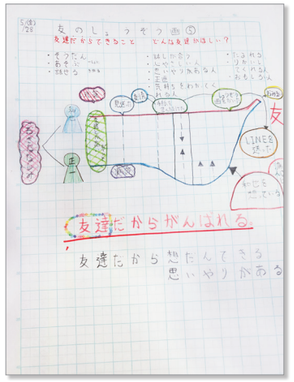
C：お互いに正直でいられる友だちがいいなぁ。ちゃんと言いたいことを言って、受け止めてくれるって思えると安心する。

C：自分もそうだけど、相手のことをわかってあげたいって気持ちが大事なんだと思う。そう思わせる友だち関係でいたい。

子どもの反応



自分たちの友だち観について、改めて問い直している様子が見られます。しかし、対話することに集中していたのか、ノートからは友だち観の広がる様子はあまり感じることができませんでした。



まだまだ「話すこと」で手一杯な様子がうかがえます。「互いを思い合うことができる人間関係のよさ」について、対話を広げながらしっかりと自分の学びの記録となるようにノートも書かせていきたいと思います。

ここはナイス！

山崎先生の実践のナイスなところは、子どもたち自身の「友だち観」を醸成するために、子どもたちの気づきを促すための具体的な手立てがいくつも見られるところです。それは、チョークの色や太さを工夫することで自ずと思考が広がるようにしているところや、「電話じゃダメだったのか」などと比較させる問い返しをしているところなどです。これらの手立てによって、子どもたちは抽象的な概念の思考が見える化され、「ちょっと待って、それなら…」というような、新たな気づきが生まれるきっかけとなっています。そのような子どもたちの言葉を紡ぎながら展開されているところがすてきだなと思います。

私ならこうする！

実践では「離れたからこそ友だちのよさが見えてきた」というような展開になっていますね。もちろんそれも大切な要素の一つではありますが、山崎先生がおっしゃるように子どもたち自身の「よりよい未来」が見えてくるような展開にするためには、もうひと工夫必要だったのではないかと思います。それは、和也と正一の互いを思う心の比較です。和也は相手からのアプローチがなくなるにしたがって、自分の興味関心も薄れていっている。それに対して正一は、和也に対する思いを保ち続け、自分にできることを懸命に行っている。友だちとのよりよい未来は、相手次第ではなく、自分次第であること。これをおさえることができたら、「友にふさわしい自分になろう」という意識・意欲をさらに高めることができたのではないでしょうか。